

求むる」旨の共同宣言が発表された（瀬川善信「一九二四年米國移民法と日米外交」、『國際政治26』所収）。

また同日、兩國国技館では「米國の措置に対し日本國民拳國一致的決意を表示する」目的で対米國民大会が開かれ、上杉慎吉帝大教授、頭山滿、内田良平らが演説し、三万人が来会した。

排米運動は映画界にも飛火し、東京市内の映画関係業者は七月一日より「米國映画を一切上映しない」旨の決議を行なった。

排日法実施の七月一日には、米國大使館焼跡に竿頭高く掲揚されてゐた米國国旗を引下ろし、窃取するといふ事件が起つたが、犯人は間もなく逮捕され、国旗も無事に取戻すを得た。

「一九二四年」の歴史の意味

排日移民法の成立した一九二四年は、米國の対日作戦計画であるオレンヂ計画が確定された年でもあつた。

一九〇四年日露戦争開戦直後の四月、米國では陸海軍統合の色別計画と云はれる一連の戦争計画が作成された。即ち赤は英國、黒はドイツ、緑はメキシコ、オレンヂは日本などと、国別にカラーネームをつけて呼ばれる作戦計画であつた。

対日戦争計画の中心はフィリピン防衛構想であつた。即ち、米國が米西戦争でフィリピンを獲得してから大正中期に至る二十年間は、日本に比島攻略の意図はなかつたのであるが、米國は日本にその意図があるものとして、太平洋戦略を着々と推進したのである。そして、ワシントン会議によつて軍備強化を凍結された西太平洋に於ける対日作戦計画「陸海軍統合作戦計画——オレンヂ」が作成されたのは、正に一九二四年八月だつたのである（W・R・ブレイステッド論文「アメリカ海軍とオレンヂ作戦計画」）。

かく見てくる時に、一九二四年といふ年はまことに象徴的な年であるといふ他ない。米排日移民法の成立は、日

本國民をして国力なき國の悲哀と屈辱を痛感させ、三國干渉以来、二度目の臥薪嘗胆がじんちやうたんを余儀なくさせた。ワシントン会議は、太平洋と極東に於ける日本の發展を掣肘するに留まらず、それが掲げた國際親善・國際協調なる理想が、所詮は一時的な幻影に過ぎなかつたことを、排日移民法によつて白日の下に暴露したのである。日本人が、ワシントン体制の下での平和主義に、偽善の疑ひを抱きはじめていたのも理由のないことではなかつた。ワシントン体制への抜き難い不信と、その体制を打破せんとする民族的志向は、否応なくここに動きはじめたのである。そして、これと時期を同じくして、米國軍部に於て、具体的な対日太平洋作戦計画「オレンヂ・プラン」が最終的に制定されたことは、日米關係の歴史的推移を象徴する重大事象であつたと云はねばならない。

ワシントン会議によつて太平洋上に新時代が到来したかと思はれたが、それもたつた二年間の幻影にしか過ぎなかつた。實に一九二四年の移民法こそは、ワシントン會議の成果を瓦壊せしめ、太平洋の平和を危殆ききに陥れ、國際親善の蓄つぼみを枯死せしめたのであつた（前掲瀬川論文）。白人世界への進出を拒まれた日本は、これ以後、滿洲を日本民族が生存發展するための新天地として、或いは「生命線」として一層注目と関心を寄せるやうになつてゆく。一九二四年は戦争と平和の分岐点でもあつた。

第二節 外蒙の赤化

ソヴェエト・ロシア、外蒙に侵入

極東に目を転ずれば、ここでもまた國際協調とは全く裏腹の事態が進行してゐた。先づ、革命後のソヴェエト・

ロシアの強大化を指摘せねばなるまい。革命直後から世界最大の軍事国家を目指して成長しつつあった赤色ロシアは、ワシントン会議に参加することもなく、無論九国条約の拘束を受けることもなく自由極東で行動することが出来たのである。極東に於て日本を拘束した九国条約が、ソ連に対しては自由行動を放任する結果になったのは、由々しい問題を残すことになった。

ワシントン会議が開かれた一九二一年七月、ソヴィエト・ロシアの軍隊は白系ロシア人追撃に名をかりて外蒙古に侵入、傀儡の蒙古人民革命党を利用して「蒙古人民革命政府」を樹立した。以下、主として後藤富雄「蒙古政治史」（昭和十三年）に拠つて外蒙赤化の状況を略述する。

蒙古赤色政府はモスクワに対し、「共通の敵より受くる脅威が完全に消失するまでは、その軍隊を外蒙古版図より撤退せざる」ことを要求した。ソ連が「好意を以て」この要求を容れたことは云ふまでもない。庫倫駐屯の赤軍バルチザンに代はつて、ソ連正規軍（第三〇八連隊）が外蒙に進駐した。

蒙古に於ける「資本家支配」の勦滅事業には、国内戦に何の係りもない無力なロシア国民が多数犠牲となつてゐる。白衛軍の大部分は無事満洲に逃れたに反し、大戦前より蒙古に植民し、又はロシア国内戦により避難した無辜の人民が多数恐るべき運命に遭遇したのである。ソ蒙赤軍は防衛とてない弱い市民に悪虐の限りを尽し、掠奪はおろか、時には老若男女の別なく、些かの憐憫もなく虐殺した。かくて例へばウリヤスタイのロシア植民は悉く虐殺され、僅かに少数の人々が辛うじて逃れ得たにすぎなかつた。これを思ひ、一九二〇年春の尼港事件を思ふとき、革命時、共産主義者によるテロ、虐殺等の惨劇は、決して偶発的なものではなく、偶発あるいは正当なる報復の外観を装ひながらも、予定された計画の下に於て実行された行為であることが洞察せられるであらう。

タンヌ・ウリヤンハイの運命

烏梁海または唐努烏梁海は、エニセイ川の発する蒙古西方辺境に位置し、北緯五〇〜五三度、東経八九〜一〇〇度にわたる地域である。北西はサヤン山脈、南はタンヌ・ウラ山脈、東方はこれら山系の延長を以て区切られてゐる。高峻な山系に圍繞されてゐるため、容易に入り難い地方である。面積は一七万平方キロ余りであるが、それでもポルトガル、スイス、ベルギーを合した以上の広さを持つてゐる。資源極めて豊富で、産金量頗る多く、白金を始め、ウラニウム、銅鉄、石炭その他の鉱産も豊富である。土地肥沃で、甘美な牧地があり、国内面積の二五パーセントを覆ふ森林は貴重な木材を産出する。住民は元来トルコ種に属し、キリギスに近似している。人口は一九二五年頃、六万近かつたと考へられる。

この地域は長い間「無主の地」であつた。一七二七年のキャフタ露清条約に於ても、ウリヤンハイの露支国境線は極めて曖昧のまま残された。露領南界はサヤン山系と定められ、支那境界線はタンヌ・ウラ山脈の南斜面に設けられた。かくの如くウリヤンハイ全域は依然として露支両国の主権の外にあつた。露清両国の全権とも、ウリヤンハイの存在を知らず、サヤン山脈とタンヌ・ウラ山脈を同一の山脈と信じたためであらうと考へる史家も居る。

露国がウリヤンハイ領有に乗出したのは二十世紀初頭、ニコライ二世の時世に於てであつた。欧州大戦の開始された一九一四年秋、ロシアはウリヤンハイ地方住民に対して、同地方がロシアの保護下におかれた旨を布告した。大戦中、支那と蒙古より数次の抗議が出されたが効果はなかつた。ロシア革命が起るや、ボルシェビキの勢力は忽ちこの地方にも及び、一九二二年八月、ソヴィエト軍が侵入し、トワ人民共和国を作り上げてしまつた。

二年後の一九二三年八月にはタンヌ・トワ人民共和国と改称されたが、このタンヌ・トワ人民共和国の眞の統治者はソ連政府と第三インターだつたのである。タンヌ・トワ人民共和国こそ、ソ連が持つた世界最初の衛星国であつた。実に満洲事変の十年も前である。

その後、タンヌ・ウリヤンハイの運命は如何？ 一九四一年六月、独ソ戦が勃発するや、トワ傀儡政府は、かのソ連式フルダダン（人民議会）を招集し、ドイツに対して宣戦を布告した。一九四四年八月十七日、ソ連はトワ政

府に指令して、ソ連領土への併合を「請願」させた。同年十月十三日、ソ連最高会議はタンヌ・トワがソ連の「自治地区」たることを承認、ここにトワ人民共和国は、ソ連といふ巨大な腹の中に吸収併合され、国家としての生命を断たれ、消滅し去つたのである。傀儡政府に対し、先づソ連への併合を「請願」させ、それを勿体ぶつてソ連最高会議で「承認」すると云ふやり方は、一九四〇年バルト三国を併合した時と全く同様の、ソ連一流の欺瞞的且つ見え透いた他国侵奪方式である。試みにアジアの地図を開いて見給へ。かつての外蒙領土のうち、北緯五〇度以北、東経八九度から一〇〇度の間の地域はすつぱり抜け落ちて居り、そこに「トワ人民共和国」の国名も「タンヌ・ウリヤンハイ」の地名も見出すことはできないだらう。ただ「トビンスカヤ自治区」の名称が、僅かに「トワ」の痕跡を図上に留めるのみである。

外蒙を占領したソ連の理由

さて外蒙自体はその後どうなつたか。

一九二二年十一月五日、ソ連・外蒙間に修好条約が締結されたが、これは「蒙古政府はソヴェエト市民に対し蒙古に於ける土地所有権を許し、ロシアの費用を以て建築せられるべき建築物・鉄道に必要な土地を占有せしめ、かつ最恵国民に許すべき一切の権利を与へる」として、帝政ロシアと変らぬ特権をソ連に与へた。このソ蒙条約は、当初秘密にされてゐたが、一九二二年春に至つて公表されるや、支那外交部はソヴェエト政府に対し、帝政ロシア政府が支那政府と結んだ一切の条約を無効とみなし、支那より獲得せる一切の租借を放棄するとのカラハン宣言を食言するものであり、旧帝政政府の対支政策となんら拮据（あやう）どころはない。蒙古は支那版図の一部である」と抗議した。

支那は蒙古の自国帰属を主張するが、ソ連はその都度、蒙古の自由を防衛するため露軍の蒙古駐屯を希望したの

は蒙古民衆自身であると繰返した。「蒙古はソ連の力を借らずしては独立を保持し難く、かつ一隣邦の餌食となるに至るべきことは、全世界の知る通りである」。このやうにソ連は主張し、「蒙古の切なる要求によつて」といふソ連一流の理屈を設けて占領を正当化した。

因に「蒙古自身のために蒙古を占領する」と云ふ理屈もソ連一流のものであり、後年（昭和二十年八月）、ソ連が日ソ中立条約を一方的に廃棄して、対日侵略を開始した理由が「平和の到来を早からしめ、今後の犠牲と苦難より諸国民を開放し、かつドイツの如き危険と破壊より日本国民を救ふ唯一の方法」であつたことを想起せしめるであらう。その後の満洲や樺太に於けるソ連の行動が、日本人を危険と破壊より救ふどころか、日本人の身の上に言語に絶する犠牲と苦難を加へるものであつたことは、我々の永久に忘れ得ぬ事実である。

やがてソ連は傀儡政府をしてソ連式憲法を公布せしめ、「蒙古人民共和国」を樹立した。一九二四年十一月、ソ連第二番目の衛星国であつた。されば、蒙古に対する支那の宗主権は結局形式的なものになり終らざるを得なかつた。中華民国憲法では、蒙古を以て支那の版図を構成する一員と明文化したが、それはあくまで文章の上に於てのことであつて、その後の外蒙は完全にソ連の指導下に閉鎖的赤色国家としての道を辿つてゆくのである。

満洲事変への道開く

ソヴェエト政府が外蒙及びタンヌ・ウリヤンハイへの侵略を行なつたのは、正しく、日本のシベリア出兵が米国の疑惑を招き、国際世論の指弾を受けつたつと時期を同じくしたのである。米国は、赤色勢力の極東侵入を防止するために日本が行なつたシベリア出兵に対しては猜疑と批判の目を向けつつも、その間、ソヴェエトが外蒙とタンヌ・ウリヤンハイに対して行なひつたあつた侵略と赤化に対しては、その恐るべき意味を理解せず、一言の批判を加へることもせず、まして、これを防止すべく何らの措置をも講じようとはしなかつたのである。その結果

はどうであつたか。外蒙の赤化は、支那赤化のルートを準備することになり、また満洲への共産主義の浸透を容易ならしめることとなつた。即ち、ソ連による外蒙の赤化と侵奪は、極東に於ける共産主義の脅威を急速に高めたのであり、十年後の満洲事変に至る大きな道を開いたものと云つて差支へないのである。

ソ連の外蒙・ウリヤンハイ侵略は、一九一九年及び一九二〇年のカラハン宣言に対する明白な違反であり、露骨な背信行為であつた。これに対する支那側の抗議についてはすでに述べた。ソ連が外蒙とウリヤンハイ地方への侵入を開始したのが、第二次カラハン宣言の翌年であつたと云ふ事實は、驚くべきことである。しかもその後、ソ連が外蒙・ウリヤンハイの内政掌握を強化してゆく時期は、支那国民党に対してソ連が「連ソ容共」を働きかけてゆく時期と完全に一致するのである。これほどの傍若無人な背信と破廉恥な侵略の例を、極東の歴史はかつて知ることがなかつたのである。

無力だつた華府会議

右の如きソ連の行動は、華府会議の根本精神に対する挑戦でもあつた。何となれば、華府に於て結ばれた「中国に関する九国条約」第一条三項は「一切の国民の商工業上の機会均等」をうたひ、同四項は「支那に於ける情勢を利用して他国民の権利を減殺すべき特権を求めてはならぬ旨を明記してゐるからである。ソヴィエトは、成程、華府会議参加国ではない。また、外蒙古と支那とは違ふと云ふかもしれぬ。しかしながら、一九二〇年代初期の混乱に乗じてソ連が外蒙・ウリヤンハイに侵入し、この地域を赤化し、その門戸を第三国に対して固く封ぜしめた行為は、華府会議に象徴される国際目標や理想からの全き背馳であり、むしろ進んで、それらに挑戦するものであつた。

米国はじめ華府会議参加国は、支那・満洲に於ける日本の特権を剝奪し、日本の大陸進出を挫折せしむべく最大

の努力をいたし、それに成功した。だが他方、ソヴィエト政府の外蒙・ウリヤンハイ侵略に対しては何の憂慮することもなく、まして、それを防止すべく一指をも動かすことがなかつたのである。それが後年、極東の歴史に及ぼした由々しき結果を想つてもみよ。華府会議に於て署名された文書には、アジアの安定を保證する力は全くなかつたのである。

後の満洲事変や支那事変を考へるとき、それより十年以上も早く、満洲・北支に隣接する外蒙がソ連に侵奪され、ソ連のアジア共産化工作の最前線基地になつてゐた事実を忘れてはならない。

軍縮、門戸開放、国際協調——これらワシントン会議の理想と精神をソ連は徹底的に無視し、踏みにじりつつあつたのだが、その重大さを認識し、その恐るべき結果を予見することが出来たのは独り日本だけだつたのである。

第三節 「現実の支那」の暴状

三つの政府をもつ国

華府会議は支那の主権と独立の尊重、領土的並に行政的保全及び門戸開放・機会均等を九国条約と云ふ成文を以て約し合つたものであつた。その大きな狙ひが、日本の満蒙・支那への進出を掣肘するにあつたことは云ふ迄もない。華府会議主催国の米国は、このやうに支那に於ける日本の行動を拘束しておくならば、支那は速やかに近代的主権国家へ成長を遂げるであらうと樂觀的な予測を立ててゐたのである。だが、華府会議後の支那の現状は、このやうな希望的観測を見事に裏切つたのであつた。米国は、「現実の支那」ではなく、「あるべき支那」を想定して